

第十八回

声を合わせ、息を合わせる(一)

息を合わせるというのは、最も大切なことです。息とは、体と心のつながり。宇宙の私の入るその緒。息を合わせるというのは、私を自分・引取の宇宙的生命に私を合わせるという。私というあなたという私も、知らない誰かや動植物という私も等しく根源に、合わせていく。

息を合わせるために、具体的にできることは、声を合わせるということです。

力を合わせるために声を合わせる、それがひとつは、息を合わせるという経験につながるのか、そんなことを試みるべく今年、すめ組「綱引き」が導入されました。

昨年のお話です。娘の小学校の行事で綱引き大会があり、何十年ぶりに綱引きを見ました。そこで感じたのは、驚き、そして違和感。何に、静かなのです。僕らが子どもの頃は「オーエスオーエス」という掛け声とともに力いっぱい引いたり力を抜いたりするのが流儀だったと思います。ところが今はずっと力を入れっぱなしで、とにかく引く引く引く引くです。筋肉が力を入れ続けられる持続時間は秒だと聞いたことがあるので、見ていて無理な感じがするのは感づきます。

この綱引きを見ていたら過労死が見えるようになってきました。突飛なようですが、今の私たちの社会の、あるいはこの方向に流れている大きな潮流、あらゆる主流がその大河に流れ込むような動向を感じるのは、

前向き、プラス志向、がんばらなくていい、本心くもりのスロークラウド、思い浮かびます。まさに「プラス志向、力を足して



切った藤のつるを放っておくと、自然発生的に綱引きが始まる

足して足していへ、足し算の綱引きです。競技としての綱引きは普通の方のようです。とこのことはそのやり方は強いのでしょけれど、勝つだけのことでしょ。押しもたぬ引いてみなとか、「われ」「ぬれ」「ま」などが、武道、身体技法、技術などの日本文化には重要な位置を占めていて、かねて人間のあり方についても重視を促していたはず。

そもそも息そのものが、車が走り続けるのと違い、呼吸と吸気が出入りしたり、吐き出すは返すものもあり、吐くように吸うように一日切れて「切れた」の構造をこころいいます(大橋良介『切れた』の構造中公叢書)。

だいたいその綱引き大会の日は日曜日です。一体いつ休んだ。イベントを通して希薄になりがちな家族関係を結びつけようが、親子共に知り合いになって地域の教育力を高めようとかいっことは、結構なことです。必要性も理解できます。ただ、イベント誘導型はもつ結構。

「家族」とかいっなら、日曜くらい家でゆっくり「何もなし」と「ただだ」過ごすことはできないのだろうか。それでは「間」がもたず、その「間」にたえられず、「コミュニケーション」では豊かにできないその「間」を埋めるかのようにつきものに繁華街に行っ消費行動をする。大切な間(ひま)もつばし金もつばす。よく見るんですよねえ、大型スーパーの食堂で、会話もな

四人別々の料理を食へ、食へ終わるや否や子どもも父親もそれぞれケータイのディスプレイやゲーム機に目をやり、母親は食へ残しをやりつつもこの世をこの世を。なんていって「家族」に躍起にならないうち。家族が大切な大事「こ言わなきゃいけない」(ひい) (ひい) (ひい)の中の空気があがるからですかねえ。



たのしい！
たんぽぽ組
の毎日



非常梯子をしっかり昇って、屋上
へ避難できました



たのしいお兄さんお姉さんと
たのしい活動



積んで 走って 傘さして 座って制作も楽しめます



海とくらしの資
料館も見たよ

